



昔語質屋  
庫卷之四

初篇

神  
牙  
松  
江  
藩



特別  
へ13  
982  
4







馬より逆さす小笠原を秀郷とせし首とせると見えたり又お門  
 記の新皇暗小神竊り中て独虫尤の地小威ぶとりのお門記小  
 由と死の流矢小命と流せざる也又今昔物語小純友父子が首と京  
 小持のゆりうべ右近馬場ありてそのう瓜奏と洛中の貴賤の  
 甚多し聖日左衛門府生掃部在上とひ畫師をりて彼首を巾洗  
 せんとおせども内裏へりち入るべし小あぶ辰写しとまわらせしと仰  
 下されく右近馬場小ゆたも其首を写しとせたりなり頭のうら  
 由かひらざりたりけ在上の物のうちを写しとせ殊小妙をひる画師之  
 云と見えたり人の肖像とせしとりの昔ゆありなりかきお門  
 か首級の京へのゆり」と記も親りりの堵の如くありてさしふ浮く  
 説とありしけん推しとれ侍りし又阿彌の第三第四條小お門純

友比叡山小登りて平安城を直下し密小逆意を相結ひといふ或ハ  
 貞盛京師あり將門が謀叛せん瓜察してこまを撃んとせひつ終よ  
 果ざりといふことこまな當時の巷談街説あるを好るのりのか物  
 小お記しとるこまお門純友東西よ起るこまごも合戦のやうと  
 按ざる小聊也謀あひしとるこまごも又貞盛の又常陸大掾國香  
 ぬしお門あ叔又るこまごもえ本不和るこま遂小所領のこまよて  
 互に干戈と動さんとその正速よ京師へ送えてその邪正を孔明  
 のり程よお門上洛して罪を謝しきり朝議格別小恩赦ありて  
 東へ海へ瓜泊るなりこの比貞盛朝臣ハ洛小あり件の將門ハ瓜家  
 の仇とるこまごのりといふとあひしておゆあぶ暗撃みせんとこ謀り  
 けぬ後ふこま瓜傳くおりの貞盛朝臣の武略を稱するのあり此

竹屋庫卷四



比叡山  
 二光  
 平安京  
 直下  
 ところ

七  
 三  
 四



伊与椽地友

灌了郎将門

質屋庫卷四  
 三



陣つねら。故ゆゑあり。経基つねもとの学所まなぶところを囲こみ。経基朝臣つねもとあそひより疑うたがひく。  
 應おこて上洛かみか。事のこと概おほを奏まをす。お門かど又一層またひとへの罪つみを倍たがへて。謀叛ぼうはんの  
 一ひと風かぜ向むかせらる。お門かど東へ望のぞみ。お門かど與世よよ三さん也や。牙くはの罪つみ道みちをかじと  
 以もて。頼たのみお門かど小謀叛せうぼうはんとせしめ。お門かど亦また武勇ぶゆうとせしめて。お  
 門かど下くだめて東國とうこく残りのこり。勢いきほひ小せう集しゆ。京師きやうしを攻せめ。海うみらんとし。  
 謀まじり。こゝへはお門かど記きの趣おもり。又また神皇正統かみみまのただただ紀きあり。平将門へいしやうもんへ執政しやくせつ  
 の家いへふつ。お門かどの使者しやの宣旨せんしを呈ませ。やけり。許ゆるさぬ。お門かどのけり。けり。  
 憤いきどおりて。東國とうこく下向くだむかし。謀叛ぼうはんとせしめ。お門かど伯父おやぢの常陸國はらけの大塚おほのつか  
 國くに香かとせしめ。國香くにか自叙みづかひぬ。お門かど坂東ばんとうと推おしる。お門かど下総國したすまのくに相  
 馬さうま郡ぐん小居せういを占とりて。都みやこと名なづけ。お門かど平親王へいしんおうと稱なづけ。官爵くわんかくとせし  
 め。お門かど天下てんか發動しやうどうと。参謀さんぼう□部卿べうけい思おも右みぎ工くわ門もん督とく藤原忠ふじわらのただ

文朝臣ぶんあそひと征東大將軍せいとうだいしやうぐんと。源経基げんつねもと藤原仲舒ふじわらのなかつゆと副將軍ふくしやうぐんと。お門かど  
 又またつる。平貞盛へいしげい藤原秀郷ふじわらのひでむねの弟あに。將門しやうもんと名なづけて。お門かど将門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 首くびと名なづけて。諸將しよしやうの道みちより。お門かど將門しやうもんへ。兼かみ平貞盛へいしげい藤原秀郷ふじわらのひでむねの弟あに。將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 その六年そのむねとし。と見えし。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 何なにと。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 臣おんそのま。將門しやうもん小せうと。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 鹿か忽たちち。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 て。後のちは。大おほ功こうと。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 武略ぶりやくの達人たつじんと。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 事ことを。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど  
 たのり。お門かど將門しやうもん記きふ由よしと死し。文政ぶんせい前後ぜんごと。お門かど將門しやうもんと名なづけて。お門かど

實屋庫卷四

五







中將 共了 誠信の 亦あり

情強 上ごふぞとせし。云々との紙假りて忠文のふの仰りうえさるる左工門  
 督誠信と右衛門督忠文と官爵名告もその唱ひ々ひさり。これら  
 五七の小説あるを軍記の義らまされば世俗大なる忠文のふこと  
 ぞり。宇治の橋姫と。その怨霊合申といひ怪詭也。その人宇治に住  
 めのひこれバよこ。又お門追討の官軍ハ朝敵滅びぬとて。駿河  
 國より京へぬり来りしころ。さく物も申記。これと將門記よる  
 と此の官軍既小將門が義とて。さく物も申記。これと將門記よる  
 小のあづは海道の子守の將軍。刑部大輔藤原忠舒の被下総  
 權少掾平公連。軍記よお門と誅す。て押領使すと。四月八日てりて  
 入部して。即謀叛の類と尋ね。その内賊首お門が舎弟七八人。或ハ  
 鬚髪を剃除して。深山入り。或ハ妻子を捐棄て。各山野小迷といひ。

このと死與世王ハ上総國より生物れ。將門が兄おれと。後承玄氏と。  
 相模國より到て官軍小教書せられし。ふるふ。さうも。忠文朝臣ハ。智  
 勇も大なる。よ。あ。さ。り。れ。あ。り。佐。三。郎。兵。衛。尉。盛。綱。法。師。三。念  
 かな。小。吾。天。慶。年。中。平。將。門。東。國。お。い。て。叛。逆。を。企。て。死。宇。治。口  
 部。卿。追。討。使。し。る。膳。と。羞。の。間。の。宣。下。有。べ。この。旨。を。申。戸。部  
 兼。と。拙。て。坐。を。起。て。則。系。内。の。節。刀。を。給。の。後。歸。宅。不。及。ば。と。直。り  
 洛外小赴るぬ勇士の志と。さ。り。こ。こ。と。り。て。善。と。後。と。申。小。鑑。よ。ん。え  
 ころ。か。は。忠。文。の。官。軍。の。後。と。し。と。を。俟。ん。と。く。妙。小。澤。軍。終。よ  
 合。我。小。の。あ。は。し。と。い。ひ。尊。君。の。説。ハ。信。じ。る。不。足。と。は。何。の。の。り。悪。乃  
 字。と。り。け。ん。が。め。て。神。皇。正。統。紀。の。悪。右。衛。門。督。と。記。さ。し。と。り。あ。や。  
 傳。字。の。の。信。頼。と。さ。り。ら。が。さ。る。又。宇。治。悪。左。府。と。さ。ひ。と。さ。り。れ。ら。

實屋庫卷四

ころるはじまの宇治小住けしむ。世帯て宇治の口部郷といひたり。喜  
 と好ましく殿様いふ二品式部卿重明親王能辨天の御子能辨天とて宇治よ  
 りおたぐ。忠文小斎とていひたり。今昔物語第二十卷いふ  
 ころ。又お門才三の女兒尼とありて如彦と法名。奥州惠日寺の  
 側小菴を掃びて寡居たり。有一日病て頓死しけり。小地孫井の  
 眞助よりて蘇生あらけり。世の人地孫尼と渾名。年八十餘  
 ころて迂化とて元亨釋書卷之十八いふ。又お門の子小平良門と  
 ころの根州吉田の城を攻め。満仲朝臣と殺さんとて。却源二綱小  
 巻きするは物ふり。その究めたる小説あり。あつて正あつて今  
 昔物語小源宛と平良文と。常武蔵の甲乙と争ひ。有一日各  
 軍とての廣野ふとて勝負とて試ふ。おとぬ馬の達者あり。

丹波守たり  
 息雄衛  
 の安ん

互ふ感して和睦するより。被宛が字と三田源二といひ良文  
 が字と村岡五郎といひたり。よりて宛と綱と。良文と良門とて。良  
 門が吉田攻といふ。大系圖より推して。お門の子  
 小良門といふ。のほ良文の高望王の季子あり。從五位下。後鳥羽  
 將軍より。村岡五郎と稱と。便お門が叔父と。將門の子。小良門といふ  
 のの出家して生涯ひとてありたり。何やういふてえたり。か  
 書名を忘まされば。頓少の搜りあり。とて。否のあらむ。又  
 平貞盛ぬ。の。丹波守あり。在任の時  
 悪瘡出。の。京より醫師を迎下して。えせけむ。見干といふ。素  
 る。の。治。の。見干といふ。妊婦の腹をさた。男児あり。は  
 それと素ふ加。調劑とて。貞盛その子の左衛門尉雄衛と

貞盛傳記





やどりのつらみ。鼻うらうまで感づるぬ。

第八 眉間尺が觸髅盃

浩知ふ。海びくる唐木の匣。高紐うけて眉間尺が觸髅盃と写れ  
しるが。古衣の迹お居る。まば衆皆ひびくこととせえて。世俗ふとさく  
あふれし。眉間尺が觸髅りて。他まる盃るふらと奇し。その紐をそく  
解てよ。とふ小唄る。ゆめゆめとけりて。獲てぞ盃とる。後小忽地跳り  
あつりのつらみ。あつりもぬ。ぬと彫て底うけし。る盃へ。鞘絵と金うく  
泥する。るれば。る呆果て笑と忍び。匣書つけ。小觸髅とあるふ。こころ  
匣と盃と。あつり合せる。ゆめゆめ。觸髅盃とゆめゆめ。人の頭顱。漆  
て。酒器と。むしりのる。ふ木彫る。るべと。区く。これい。つらみ。と。新ま。盃。ゆ  
歎息。何あふ。この名。ある。ま。某も。徒て。あふ。彼眉間尺と。つら。猛者。ハ。唐

山楚國の劔匠。干将莫邪が子。をりる。楚王の妃。肥満て。夏の日の。執  
と苦。と。た。蔵の柱と抱。と。身と冷。ゆ。ひ。く。終。ふ。その。気と感。づ。て。中。  
る。と。蔵の丸。と。と。あ。つ。小。産。ゆ。ひ。ぬ。是。究。上。の。濁。疾。る。る。ば。楚。王。を  
りて。干。お。小。劔。と。造。じ。ゆ。ひ。る。干。お。命。と。う。け。ゆ。り。その。妻。莫。邪。小。合。能  
る。凡。三。年。ゆ。と。雄。雌。の。劔。と。び。ゆ。り。ゆ。つ。と。陽。の。劔。と。干。お。と。名。つけ。陰  
の。劔。と。莫。邪。と。唱。ふ。と。と。二。つ。ら。進。む。と。と。惜。く。さ。ひ。く。陽。の。劔。と。深  
く。陰。の。一。口。と。た。て。する。小。楚。王。の。成。る。と。の。遅。と。怒。り。て。立。地。小。干。将  
と。衆。と。り。る。ま。る。小。干。将。が。遺。腹。の。男。見。ゆ。り。り。彼。と。成。長。小。る。び。て。身。の。丈  
高く。脊。骨。つ。つ。眉。の。間。の。廣。た。と。一。尺。小。の。甲。は。眉。間。尺。と。ぞ。喚。ま。し。ける。  
かくて。有。一。日。母。莫。邪。小。父。の。工。を。問。ふ。母。ハ。啼。泣。コ。子。小。對。ひ。ん。身。が  
又。楚。王。の。為。小。劔。と。ゆ。り。ゆ。ひ。か。三。年。ゆ。と。修。果。と。王。の。遅。と。責。又

一のむす劍のいさむと怒つて家あつてを殺しむひさかめぼと謀く  
 まれば此身が父まゝたよ吾儕小密語もやう。これゆゑ殺されし戸と出せ南山  
 と平まれば松の上小生の劍ハその背ふあり。腹の子成長後小問ハ如け答ふと  
 直せと告ふけしハ眉間尺大さふ驚き又が非命の死を悲そそそを南山小  
 野こつ。終つて件の劍と獲て楚王と相懇んとなかり程小楚王の夢す。  
 一個の少年の眉間の廣さ二尺ありあるが王と父の仇を報んとと  
 とめんとす。よろそむよれと憎むと眉間尺が頭とぞりても六千金と  
 賜べとて國中募りくハ眉間尺脱去て山中小呻吟むる。客も  
 ぞと見ふあり。そのうち歎く故と問ふ父の仇人を報ひむ。その顔末  
 と物語は客けて感激し。これゆゑ楚王頻小おん身が頭と干將の劍を  
 求む。と獲て献らば恩賞限るらんとなり。りこの二物とて小借る。

一ハ必おん身が為小仇と復みべとつハ眉間尺飲び。若てまづうら刺つ。  
 頭と劍と両手小提生るか如くまうけ。客もとてとて候と流。これ  
 牙小肩下と言を放て替り。一ハ軀ハ撲地と休まら。かくて客もとて  
 楚王小おんま。王欣びてこれとん小眼と睜じ齒と切り。母生ふ異るべ。  
 客王小おんやう。これハ勇士の政あり。煮爛しめるとつハ王とまよとてかひて。  
 大なる獲小湯とて。こまと煮ると三日三夜もなごも。身たごらもを  
 うら小王とまと怪そ。まづうら獲の母さふおれて。一ハ眼んととる。亦と客ハ  
 背ふありて干將の劍と。拔王の政とうら。其獲の中へ破し入る。客劍  
 とまづら母と。まづうらもかたねて。三の首獲の中ふて。りうとも小燭とつ。  
 何とと王とも。これハ楚王の臣。三の政と。つとぞ奪りぬ。今も汝南  
 の北の。宜春縣の界あり。三王墓とまら。つとて。漢土の書

于將 劍 三 七 心  
か 頭 烹 心

寶屋庫卷四



行客

楚王

十六

寶屋庫卷四



三尺干赤

十六





捨るの号ハ出ル。カミバ鞠繪も神へそまらう起るのときも。
 鞠繪三鞠繪るんどの。その妻少小従人の。亦同今演らる。眉間
 尺が。晋の干宝が。捜神記の。楚王の妃。
 穢の丸を産け。示干おが子の名を赤と。眉間尺と唱る。
 赤く眉間尺と名つけし。彼捜神記十一。小の漢の。
 越春秋と此彼撮合し。一條の物語と。呉越春秋といふ。
 當時の小説る。虚言ありと。文の常
 春。吾が。捜神記。干おが子の赤が眉間一尺と。
 春秋小伍子胥が眉間一尺と。呉越春秋の。
 一尺。眉間一尺。伍子胥と。

干お莫邪が雄雌の劍と。同書。二。我は騎射の切。
 下將。清々名劍二枚と。干將の呉人なり。歐冶子と師を。
 俱ふ。劍をつ。これ先越の國。二枚を。
 宝と。故と。劍匠と。一と干將といひ。二と莫邪
 といふ。莫邪ハ干將が妻なり。かくて干將劍と。
 英と。天は候ひ地は。陰陽光と。百神臨視。
 金鐵の精。と。論。干おその由と。
 筒月。遂は莫邪が。夫妻。
 妻。髪と。童女。童男。二人。
 陰陽の劍成。干おその陽を。
 劍と。魯の使季孫。

此の季孫を抜てる小録の中缺する季孫の正。歎息して整  
 納めこの叙の實小天下の宝なり。今宝劍のつたはるは呉の霸王と  
 べは祥の情を缺るところのなよ亡んも又遠くは。これの劍を好むと  
 どのも受がじとく。受じてきぬ。國又國中の金。物。呉の。と。仰るの。小  
 仰てよく釣を解。の。の。を。賞。と。ふ。百。金。と。り。て。せ。ん。の。時。は。他。釣。者。  
 利を貪るが為。その子二人を叙。血。豊。て。遂。は。二。釣。と。つ。つ。は。これ。と。吳。王。  
 献。て。賞。金。を。求。ま。ば。國。國。の。と。り。釣。と。つ。つ。の。め。の。は。是。り。汝。ひ。り。  
 賞。と。求。る。は。い。ふ。ふ。ぞ。や。と。又。ハ。作。釣。者。答。て。某。が。釣。ハ。貪。る。な。よ。子。と。も。と。叙。  
 血。豊。て。終。は。二。釣。と。つ。つ。ぬ。か。ま。バ。凡。常。小。異。と。り。み。王。と。を。受。て。と。り。  
 と。どの。も。が。釣。ハ。甚。き。り。既。は。ひ。り。ふ。藏。め。た。れ。と。た。が。じ。と。り。入。り。  
 その。の。の。野。の。釣。小。對。ひ。て。ふ。り。の。子。と。も。の。名。と。呼。び。つ。吳。鳴。扈。越。言。ハ

何れ小の。き。出。り。と。呼。中。の。ぬ。は。西。の。釣。師。出。り。又。胸。を。著。と。り。  
 吳。王。圍。國。と。し。と。り。且。怪。し。且。嘆。し。お。く。百。金。を。与。せ。り。  
 叙。と。し。は。こ。を。搜。神。記。ハ。假。借。し。吳。王。と。楚。王。と。二。月。と。三。年。と。魯  
 の。季。孫。が。劍。と。相。し。弔。の。中。季。孫。と。り。缺。と。る。な。よ。遠。く。ら。は。吳。乃  
 亡。ん。と。し。と。り。楚。王。の。干。將。の。劍。の。故。と。喪。ふ。と。叙。又。他。釣。者。が  
 子。と。叙。血。ぬ。り。賞。金。を。求。め。し。と。め。を。解。て。干。將。が。子。の。と。り。ら。劍。を。  
 叙。と。共。小。客。の。托。せ。と。の。仰。り。又。客。が。命。を。損。く。干。將。が。子。の。為。ふ  
 楚。王。と。叙。世。と。仰。し。の。專。諸。が。と。を。解。と。り。こ。も。又。吳。越。春。秋。一。卷。小。伍  
 子。胥。が。楚。國。より。脱。て。吳。國。へ。比。比。吳。の。專。諸。と。叙。且。て。勇。力。を。双。  
 俠。客。の。り。伍。子。胥。と。叙。了。相。結。と。り。公。子。光。彼。專。諸。を

艱しう。そのら公子光が王僚をえらるる。鮒炙魚の中ふ劍をかす。病と  
 専諾とて王僚を刺せとあるを嫁りしう。又客があるも赤眉。所云か  
 身よ令を將とせしは蘆中の人と擬しるる也。伍子胥が楚を逃て吳よ  
 入時追兵背よ迫まども。津よ舟は時ふ蘆の中より。一葉を漕りて子胥を  
 渡し又餉を多く食せし。伍子胥の叮嚀よ再生の恩を飲びてえ  
 こころを志ましても。漏れぬひそこし。芦中の人喜ぶ。これ人よ賞  
 とも。これと志ましても。漏れぬひそこし。芦中の人喜ぶ。これ人よ賞  
 まあふ。このひものど忠地入水と死しう。と亦是呉越春秋の言えし。戦  
 國の仁俠のり。ののかる救。まを假りて客のよと世。秋赤眉。眉間かめ  
 結の全體を推した。伍子胥が楚國へ攻入りて。楚の平王の墓を覆き屍  
 と合て人の仇を報ひ。決記よとめ。託を假りて干ねが子の仇報り。

りあふ。又楚王の干將の刃を獲て。まを煮る。三宵三夜みく。そのりう  
 変ま。と假り。呂氏春秋巻の十。至忠篇。驍。小赤丹の滑王が怒て文  
 執と煮る。三宵三夜みく。そのまを煮る。まを煮る。まを煮る。まを煮る。  
 齊王。即齊王。痛と疾。人を宋國より。して文執を迎む。文執。至  
 て王の疾と視る。太子よまを治す。王の疾。必こし。まを治す。まを治す。  
 の疾。已死。必これと叙。のまを治す。太子よまを治す。王の疾。必こし。まを治す。  
 怒。彊うら。まを治す。その疾。治す。まを治す。王と怒。まを治す。まを治す。  
 と。太子よまを治す。文執。拜。苟も王の疾。已ん。臣母と。まを治す。  
 りて。王よ争。必こし。と救。まを治す。先生。患ひ。まを治す。まを治す。  
 点。改て。死を。りて。王の。まを治す。療。治せ。まを治す。と。兼。引。太子よまを治す。  
 期。を。定め。り。か。て。王の。まを治す。まを治す。まを治す。まを治す。

中禁の小説ハ唐山の小説を倣うやうなまうり。あつれども世俗覽る正博くら  
 するものハその虚言なるをまうり。出外ゆるをまうり。婦幼ハことと実うと一と  
 その虚言をまうり。されハ小説を倣うとの容易かたがる。くハさうして。復んと  
 又雅。又和漢虚实暗合のとあうり。日本紀安康紀は眉輪王又の仇  
 と稱して天皇を殺しなる。雄略紀は眉輪王逃して圓大臣の宅に入り。天  
 皇使と遣はれてを求め。大臣とあうり。その女韓媛と。葛城の宅に  
 區と献アて眉輪王と黒彦皇子の罪を贖んと請うせども。天皇徳を  
 火を縱てその宅を燔し。ゆはは大臣と黒彦皇子。眉輪王と三人俱に燔  
 死する。時よ坂合部連贄宿禰皇子の屍を抱て燔まぬ。その舎人木焼る亦  
 と叔取る小骨を擇とぐけま。こまを二つの棺に盛て合葬す。新漢擬本  
 南よまるとええと。眉間尺と眉輪王と。その青相似と。又眉間尺と楚

擬本の  
 の誤

中禁の小説ハ唐山の小説を倣うやうなまうり。あつれども世俗覽る正博くら  
 するものハその虚言なるをまうり。出外ゆるをまうり。婦幼ハことと実うと一と  
 その虚言をまうり。されハ小説を倣うとの容易かたがる。くハさうして。復んと  
 又雅。又和漢虚实暗合のとあうり。日本紀安康紀は眉輪王又の仇  
 と稱して天皇を殺しなる。雄略紀は眉輪王逃して圓大臣の宅に入り。天  
 皇使と遣はれてを求め。大臣とあうり。その女韓媛と。葛城の宅に  
 區と献アて眉輪王と黒彦皇子の罪を贖んと請うせども。天皇徳を  
 火を縱てその宅を燔し。ゆはは大臣と黒彦皇子。眉輪王と三人俱に燔  
 死する。時よ坂合部連贄宿禰皇子の屍を抱て燔まぬ。その舎人木焼る亦  
 と叔取る小骨を擇とぐけま。こまを二つの棺に盛て合葬す。新漢擬本  
 南よまるとええと。眉間尺と眉輪王と。その青相似と。又眉間尺と楚

王客の以煮爛まき分別を以てはなす楚國の臣下三の以て宜春縣の鬼  
小合葬と三王墓と唱ふると干室が小説と眉輪王と黒彦皇子。圓大  
臣と共に燔死させし。骨を擇ぐになす贅宿祿が舍人小合葬し  
新漢擬本の南ふまきといふ日本紀の起と粗相似し。天地の間物ごとく  
對うとよまぐれば。かまは輓絵を木の文ありとよむ悞曲水は鶴を流し  
といふをふ因する生物と又輓絵の眉間尺亦三人の以て象りしること  
多ひ悞て融體盃と名つけし白物と亦一對あり。今こそよま真の眼  
めくらんまふ遇は。よろらぬ名をば除く。まじまらぬこととバ盃は飲ひ  
つ。舊の匣みぞ入り小け。

第九 橋逸勢清命の一行物

衣ふといひま。窶まて由卑かぬ殊なぬりしる肖像不妙なる昔の  
跡もて富貴化人合。貧賤親戚離と類せん。こまのん當時三草  
のその一人とせよ名たる。橋朝臣逸勢が。一行物と志されし。そのとま  
古画の尼君ハ。おひあせれる眉うち頻め。こまの彼清命人逸勢が女  
る。妙沖を侍らし。こまもこま又年老て。こまも伴健岑が。謀殺の  
る。小坐せよ。東路へ流されぬ。配所をへるも。旅ふむ。く  
る。のの。こま。その罪ふあ。され。終。大赦の。対。あ。白骨及洛の  
朝思小澤ハ。刺位を贈。こま。小傀儡の。謡曲。能。し。の。が。あ。ぬ。悪人  
小書。殘。伴の。強宗。と。や。ら。ん。名。も。ま。ま。ぬ。叛。逆。人。の。副。淨。よ。つ。ひ  
く。婦。切。ハ。お。る。べ。て。橋。逸。勢。ハ。大。悪。人。ぞ。と。憎。む。こ。ま。の。こ。ま。と。り。と  
説。あ。ら。ば。生。世。の。寛。枉。ら。り。死。の。後。の。誣。言。小。又。ま。る。其。の。つ。を。う。り。心

板築の  
驛  
妙沖尼  
父の  
死  
成る  
ところ



橋本幸房

妙沖尼

苦くおぼさる。既小たりな澄文あり。文徳実録卷之一。十時。小嘉祥  
三年。五月壬辰。流人橋朝臣逸勢。正五位下。追贈。死。さる。由。  
遠江國。下。のひて。本郷。海。葬。ら。のひたり。抑逸勢。右中辨。  
從四位下。入居の子。性。と。あり。放。愛。て。細。節。は。拘。へ。尤。ま。て。隸。書。よ。  
妙。あり。た。され。バ。宮。門。の。榜。額。ふ。る。人。の。手。跡。見。在。り。桓。武。の。お。ん。と。た。  
近。曆。の。季。子。遣。唐。使。小。隨。て。唐。朝。小。到。り。る。唐。の。中。又。人。を。こ。こ。を。稱。く。橋。  
秀。才。と。の。ひ。と。る。へ。か。て。帰。り。ま。る。の。日。教。官。を。歴。事。し。が。年。老。羸。病。し。る。  
と。り。て。閑。居。を。仕。し。ま。る。に。か。り。程。は。承。和。九。年。連。み。伴。健。岑。が。謀。  
反。の。上。と。降。り。ま。て。掠。擄。ま。る。も。服。ど。う。と。そ。の。死。を。滅。ら。し。伊。皇。國。へ。配。流。  
ま。る。り。こ。こ。の。逸。勢。が。配。流。に。赴。く。と。た。只。一。女。あり。悲。泣。て。又。と。慕。ひ。歩。  
ら。う。と。從。へ。バ。官。兵。監。送。者。を。と。り。て。從。へ。と。を。稱。さ。ぬ。と。女。見。か。た。る。

遠くも去るに晝に止て夜にぬ潜す小徒入程又逸勢ハ遠江あり  
 板築驛まで到行り。こよ逆旅小舟するりたり。女見ハ天に叫びつ地  
 小根縛て悲めども救へずものあふらんば。かく驛下小葬りて喪前下戸を  
 掃び屍と守りて遂に去るに落髪して尼とあり。妙沖とある名告ける  
 されば亡父の為小誓念小雲時由解らぬ。曠より暮々まで苦行ん  
 常ふあふれば路人由こまか為小洞衣襟と濡ぬかてぬ一葬ること  
 詔あふるびて女僧の父が屍と負て晴す小ぬ京せくは時の人感嘆し  
 稱て孝女と名びるせり。又同書の巻の五の第十二張小仁壽五年。  
 五月甲寅正五位下橘朝臣逸勢小從四位下に加贈りゆふの紙  
 記し。うまふ正史ふんゆまじ。國史なる俗稀るれば実りのなき  
 で系竹のうまふりふひく艶曲と。このことこふりの為小教馬は

り。凡物語と他する小善人と悪人ありて纏む。悪人と善人ふれり  
 ぞ。吾以勤め悪を懲り人情と演理系と正とを野史とも。真の小説  
 とも。喝々と笑えする小悪人ありぬ。又と悪人といつる。折して推量  
 あまといひうけ。うら酸鼻ありあま。またりあとも小目と拭ひかき  
 逸勢ぬハ字同中。手迹あり。唐山中も名とあり。いとも  
 愛した文人あり。一旦罪とぬるも。身後小罪あり。位  
 入贈りゆふこと。こまか作が孝行と。神由憐れありあふも  
 恩恵せのふるん。りつべさりのけり。かる孝女のありとも  
 ちと。妙沖尼といふ名とせら。今たてめて織る純中と。これらの條こそ  
 草紙のそく書も。あめ世の女女子。孝行と勤る書能りの本  
 意なるべし。さるる鬼假の謡曲あり。その名の極くばあふ。吾人あり



丑淨止。その名の優ゆうふはつるをば。よろらぬ人でも正生しょうせいへおまわつて分ぶんり  
 有らん。さへば左さだ辯べん希世まれよのぞ死し。昔家せんけ左辻させのころあんどよ。かづらひ  
 する人あひあねど。まわりあひせのよろらばどく。震死あらいまひひひ。人  
 の部ぶへ入いりまて。母はは悪名あくめいを流ながすれど。あつ人ぞあつ。あつあつあつあつの流なが花  
 いいのりのりのつるあね。むむびむ我われまひひねとさる。町まち噂うわさ小慰こゝろまひまひ。驩らん一いち死  
 人の言ことの茶ちやふ。花はな用もちぬぬ身み由よし春はるよあふ。さつらさつらてをよめよめつてつてせせれ。世  
 ても俗ひととも恨うらむむままと。回くわい應おうつつたつ。昔せん衣え身みの幅はた廣ひろまま尼あま女むすめが  
 孝こうの徳とくを有ありけしまし。

昔語實屋庫卷之四終

